

# 改訂宣教基礎理論

## 第二次草案

### 目 次

宣教基礎理論の改訂にあたって

#### I 三位一体の神の招き

1. 神の招き
2. 歴史の中で実現する神の招き
3. わたしたちの使命と喜び

#### II 宣教の主体であられる神

1. 神の永遠のご意志
2. 神の民に賜った宣教の務め

#### III 宣教の内容

1. 中心としてのキリストの出来事—罪の赦し
2. 生の全領域における変革
3. 終わりの日の完成

#### IV 宣教の対象

1. 神なしに生きようとする現代人
2. 異教国日本に生きる同胞たち

#### V 宣教の方法

1. 各個教会の形成と充実・成長
2. 信徒の証しの生活
3. 信徒の社会的証しについて
4. 地の果てがなくなるまで—伝道協力の必要性

#### VI 宣教の目標

1. 神の国の成就
2. 日本社会および世界が神の国を映し出すこと
3. 神に栄光を帰すべきこと

## 宣教基礎理論の改訂にあたって

今回の宣教基礎理論の「改訂」は、1963年の「宣教基礎理論」が作成されてすでに約半世紀を経ており、その神学的妥当性において少なからぬ疑義があるためです。ことに、教団は1969年のいわゆる「万博問題」以来、福音理解においても、宣理解解においても、混乱を経験し、その中で教勢も低下し続けています。この混乱の原因の一端は、先の「宣教基本方策」および「宣教基礎理論」において、「神との和解」という垂直的次元への言及が欠落していたからだと考えられます。

50年前、先のものが作成された当時は、1950年代の莫大な外国資金の投入、また、戦後のキリスト教ブームでの受洗者の増加が見られたにもかかわらず、教勢がカトリックと合わせても依然として1%の線を越えられず、福音も一般大衆には浸透していなかったという反省がありました。そこで、宣教百年の盛り上がりを機に作られたものが、先の「宣教基礎理論」であったと言えます。その主張の二本柱のうち、特に「教会の体質改善」には相当に大きな神学的問題がありました。その主張は、これまでの教会の「内向き」の体質・姿勢を批判し、教会はもっと「社会の激変」に対応するよう、「外向き」の姿勢を取らなければならない、というものでした。しかし、この「外向き」になるという主張は、教会形成や伝道がその主要内容ではなく、むしろ、社会や歴史への直接的な関わりや社会変革に力点があったため、やがて「教会派」と「社会派」との対立と相互不信を生み出す結果となり、教勢の低下を来しました。

たしかに、「内向き」となる傾向は避けなければならないでありましょう。しかし、キリストの体としての教会にとっては、内向きや外向きである以前に、神との垂直的關係において教会が教会であるかどうか、常に優先されるべきです。

教団はすでに第31回教団総会（1998年）において、伝道を長い間なおざりにしてきたことを主の前で真摯に悔い改め、反省し、「21世紀の伝道に全力を注ぐ決意表明」の議案を可決しました。今わたしたちは、この反省を踏まえて、先の「宣教基礎理論」を改訂し、宣教二百年を主の祝福と喜びの内に迎えられる伝道実践の展開を、主から求められています。

わたしたちは「宣教基礎理論」の改訂作業において、宗教改革の根本精神に立ち帰りたいと願いました。宗教改革の中心は、「信仰義認」という福音そのものの回復にあります。しかしそれだけでなく、それは教師が聖書に立ち帰る説教運動でもあり、また、信徒が聖書を読んで祭司としての自覚を新たに作る運動（全信徒祭司性）でもありました。宗教改革の三大原理としての「信仰のみによって」・「聖書のみによって」・「全信徒祭司性」は、お互いに切っても切れない関係にあります。この三大原理が共に活かされるように、説教の向上のための共同研鑽と、信徒が週日にも聖書を読む「聖書日課」とが、日本の教会の起死回生のための生命線だと考えております。

ただし、本「改訂宣教基礎理論」はあくまでも宣教についてのもっとも本質的な理論にのみ自己限定したものです。その時々必要に応じた実践のための考察については、当然別の枠組みが用意されるものと期待しております。

201 年 月 日

第38総会期 常議員会

# I

## 三位一体の神の招き

初めにわたしたちは、宣教が実際に歴史の中で出来事となっている事実に基礎をおくことから出発します。すなわち、神の招きが現になされ、それに応えて洗礼を受ける者たちが現にいるという出来事についての、感謝と喜びと共感から、わたしたちの考察が始まります。それにあずかるよう召されているわたしたちの喜びもまた、そこに基礎をおいているからです。

### 1. 神の招き

①主は「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタ11・28)と言われました。三位一体の神は、ご自身の喜びに満ちた交わり、すなわち、「永遠の生命」(または、「神の国」)へと、罪人をお招きくださいます。この神の憐れみに満ちたご意志を人々に伝達することが、宣教です。

1ヨハ1・3 (以下『聖書 新共同訳』による標記)

②神は礼拝と賛美を受けるにふさわしいお方です。神の国の究極の姿は、被造物がこぞって神を賛美し、すべての栄光を神に帰する喜ばしい礼拝です。人間はそのために「神のかたち」に造られ、神の国へと招かれています。その最高の幸福と喜びは、礼拝の中で神を賛美することの中にあります。

創1・27; 出5・1; 黙4・11; エフェ1・3~5; 詩22・23; 同84・5; 同102・19; コロ3・16

### 2. 歴史の中で実現する神の招き

①父なる神は、この神の国の実現のために、時満ちて御子を人としてお遣わしになりました。また、御父と御子は聖霊を絶えずお遣わしになります。

ヨハ20・21; 同14・26; マコ1・14~15; フィリ2・6~11

②聖書によれば、神の国は受肉したイエス・キリストの十字架と復活によって、すでにこの地上に先取りの形で確立されています。それがすなわち、神の民によって構成されるキリストの体なる教会です。神の国はこの教会において存在し、広まりつつあり、歴史の終わりににおいて完成されます。

マコ1・14~15; マタ28・18~20; イザ52・7; ロマ10・14~15; 黙21・3~4

③「福音」は、神の国が来たことをあまねく告げ知らせます。福音は神からの良い知らせ、すなわち神の言葉であり、この神の言葉は、「言が肉となった」(ヨハ1・14) イエス・キリストの出来事そのものです。この「言」を聖霊の権威によって証ししている聖書および説教の言葉も、同じく神の言葉です。わたしたちキリスト者は神の言葉を聞くことによって造り変えられ、わたしたちのすべての言葉と行いが、この神の言葉を指し示す「証し」となります。

ヨハ5・39; 2テモ3・16; ルカ4・21; 1テサ2・13

④ここからただちに、「宣教」とは、第一義的には、福音を宣べ伝えること、すなわち、「伝道」のことである、と結論されます。ただし、真実な伝道は必ず「証し」を生みだします。

ロマ10・17

### 3. わたしたちの使命と喜び

①教会の主イエス・キリストは、天においても地においても一切の権能を授けられ、人間のすべての問いに対する究極の答えとなりました。また、キリストが父からこの世に遣わされたように、キリストはわたしたち教会をこの世に遣わされます。まだその外にいる神の民が一人でも多く、一日も早く神の国の喜びに共にあずかるよう、福音宣教の務めにたずさわらせるためです。

マタ28・18～20；ヨハ20・21；使18・9～10

②宣教は神が始めてくださった「善い業」（フィリ1・6）に由来します。神の国の喜びが罪人にまで伝えられるとき、その道具として用いられる教会もまた「天の大きな喜び」（ルカ15・7）にあずかります。反対に、もし福音宣教をなおざりにするなら、教会は福音の喜びそのものを失い、みずからの存在意義を失うだけでなく、「役に立たない僕」（マタ25・30）として見捨てられます。

1コリ9・16；ヨハ3・29；同4・36

③宣教という神の業が、人間の思いによってではなく、神の御心にかななって実を結ぶよう、聖書の言葉に基づいて、その務めを吟味することは大切です。

マコ13・35～37；1コリ1・21

## II

### 宣教の主体であられる神

宣教が現になされていることは、前章で述べられました。ここでは、それが神の永遠のご意志、すなわち、神の「恵みの選び」の中に根拠と必然性を持っていること、さらに、宣教においては神がそのご計画を立て、実際にも宣教の主体として働いておられることの中に確かな可能性があることが示されます。そのことによって、宣教にたずさわるわたしたちの喜びは確実なものであることが確認されます。

#### 1. 神の永遠のご意志

①神は教会を永遠の昔より愛し、「御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」（エフェ1・4）。さらに神は、この教会を通し、罪人をご自身と和解させるために、救いのご計画を立て、世の終わりまで、救済史を導かれます。

2コリ5・19；ロマ11・33～36

②宣教がそもそも可能であるのは、神が人間を一方的な「恵みの選び」によって、救いへと選ばれたからです。神の選びは、人間の業や功績によってではなく、神ご自身の永遠に変わることのないご意志によるものです。神の選びが確かであるゆえに、わたしたちは、自分の救いに関して恵みの選びが成就することを確信し、それと同じように、隣人の救いを熱望し、忍耐強く祈り、かつ、伝道することができます。

エフェ1・4～6；同2・4～6；同1・10；ヨハ15・16

③また、わたしたちは伝道する時、実際に御言葉を語っておられるのは、わたしたちではなく、神の霊であると

知ることによって、力づけられます。

マタ10・20

- ④人間は「神のかたち」に造られていますので（創1・27）、神と出会うまで、平安を得ることができません。神に愛され、神を愛するとき、わたしたちはさらに、神がお与えくださった自分の隣人や家族、職業などを愛するようになり、真に幸いな人生を歩むようになります。人生とは、そのことを発見するための旅路である、とも言えます。

ヘブ11・13～16

- ⑤同様に、世界史の究極の意義は、恵みの選びが成就することです。それゆえ、世界史の終わりは、救済史の完成です。そのとき、新しい天と新しい地が現れ、わたしたちは朽ちないものへと変えられ、永遠に神を賛美するでしょう。

エフェ1・11～12；1コリ15：50～55；黙21・1～4

## 2. 神の民に賜った宣教の務め

- ①神はその民である教会に宣教の務めと福音の言葉とを与えられました。したがって、教会の務めは宣教によって福音の前進に奉仕することです。

2コリ5・18～19；ロマ10・15

- ②キリストの体である教会に属するすべてのキリスト者は、受洗と同時に祭司としての職務に任ぜられ、その全存在と全生涯が神の召しにあずかっています。また、そのために必要な霊の賜物をも与えられています。この「全信徒祭司性」の教えが、今日十分に回復される必要があります。そのために、教師も信徒も絶えず聖書の御言葉によって養われ、成長しなければなりません。

- ③「祭司」の務めとは、礼拝共同体としての教会を形成し、神を礼拝する民となることであり、宣教と執り成しの務めを担うことです。

1ペト2・5；同2・9；ロマ12・1～2；エフェ4・11～16；1コリ12・4～31

- ④全信徒祭司性とは、教師と信徒の区別を解消しようとするものではありません。天に昇られたキリストは、この地上に教会をお建てになるために、教会の中から「使徒、預言者、福音宣教師、牧者、教師」（エフェ4・11）などを任命し、各々に必要な霊の賜物を与えられました。これらの御言葉の奉仕者は、信徒と共に宣教の務めにたずさわります。

- ⑤御言葉の奉仕者は、喜びと勇気をもって福音を宣べ伝え、聞こえる御言葉である説教と見える御言葉である聖礼典のために仕え、自分の全生涯を献げます。この務めは教会形成の中心となります。また、その人はただこの召命のゆえに、教会の中で敬われるべき存在です。

エフェ4・11；ヨハ20・21；同21・15～19；1テモ1・18；同4・12；2テモテ4・1～5

- ⑥御言葉の奉仕者は絶えず成長します。そのために、常に聖書をひもとき、祈り、御言葉の研鑽に励み、練達の人となるべきです。「わたしに倣う者となりなさい」（フィリ3・17など）と語れる者となる必要があります。御言葉の奉仕者が成長し、生涯を伝道に献げることを願い、全体教会（教団）がさまざまな仕方で支え、必要な神学教育を施すだけでなく、さらにその後も研鑽の場を設け、生涯のある時期研鑽に専念する機会を備えるなどの制度を整えることは本質的に必要なことです。

エフェ4・11；2テモ3・15；1テサ5・16～22；2テモ4・2；1テモ4・12

⑦信徒もまた、御言葉の奉仕者と共に教会形成と伝道に参加します。信徒は何よりも第一に、礼拝および諸集會に参加する務めを重んじる必要があります。また、教会の健全な成長（礼拝、伝道、奉仕、交わりなど）のために祈り、務める必要があります。また、献身のしるしとして自分の財を献げることにより、教会の維持発展に資する務めがあります。旧約聖書の十分の一献金は望ましい基準です。

ネヘミヤ8・10；出29・42～45；使2・46～47；エフェ4・16；ロマ12・6～8；申14・22；2コリ9・7；マラ3・10

⑧福音宣教において、信徒の果たしうる役割にははなはだ大きなものがあります。また、御言葉の奉仕者の「献身」と同じ意味で、すべての信徒がその全生涯を主体的にささげる「献身」に生きるようにと招かれています。

⑨御子は御国を来らせるために、十字架にかけられました。それゆえ、十字架の福音を宣べ伝える教会もまた、十字架のしるしを帯びることになります。「証し」は「殉教」にまで至り得るものです。ただし、命を捨てることだけが殉教ではなく、むしろ、キリスト者が信仰に堅く立って歩む毎日が殉教とも言えるでしょう（ギリシア語では同じ「マルテュリア」という言葉が、「証し」をも「殉教」をも意味します）。

マタ16・25；コロ1・24；フィリ1・29；同3・13～14；使14・22；ロマ12・1；2テモ3・12

### Ⅲ

## 宣教の内容

宣教の内容は、神がご自身に背いたわたしたちをなおもみもとにお招きくださる「和解の福音」です。福音においては、まず第一に、わたしたちの罪がただキリストの義によってのみ赦されたこと、したがって、その義はただ信仰のみによって罪人に与えられることが語られなければなりません。ただし、この罪人の義認は、同時に聖化と召命とを必然的に生み出すものであることが、福音の中には含まれています。

### 1. 中心としてのキリストの出来事—罪の赦し

①宣教内容には、「日本基督教団信仰告白」との一致が求められます。したがって、神学校には日本基督教団信仰告白に基づく伝道者養成・神学教育を行う責任があります。

②福音の内容は、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハ3・16）という御言葉に要約されます。この福音は、今この歴史の中ですでに現実となっています。罪人が神と和解させられ、礼拝と賛美へと招かれているからです。

ロマ5・6～11；2コリ5・18～21

③人間は自分を神としようとして罪を犯し、神との平和を失いました。神は聖なるお方ですから、本来ならば、人間の罪を見過ごすことがおできになりません。罪人である人間は聖なる神と対立しており、神が義であるか、それとも人間が義であるか、言い換えれば、神が滅びるか、それとも神が人間を滅ぼすか、どちらか一つでしかありえない由々しい事態が生じたこととなります。

ヨシュ24・19～20；イザ6・1～5；同57：15

④しかし、人間は罪の結果としての悲惨さのただ中にながら、それが自分の罪のゆえであるとは認めず、他者に責任を負わせようとします。それゆえまた、自分の悲惨さについての認識もきわめて不十分です。しかし実は、自分がお生かされているのは、憐れみ深い神の限りない忍耐と寛容によることなのです。

創3・5；同3・12～13；ロマ2・4；同6・23

⑤御子イエス・キリストの十字架において起こった中心的な事柄は、人間の罪を取り除くことです。すなわち、キリストは、わたしたちの現実を憐れみ深い目でご覧になり、そのもっとも深いところにまで根を下ろしている闇の部分に立ち向かってくださいました。ただし、それは驚くべき仕方で、すなわち、御子が御父に従い、全人類の罪を身代わりに背負って十字架上で「呪いの死」を死なれる、という仕方において起こりました。これにより、罪は完全に取り除かれました。

ヨハ1・29；同5・19；同12・31；同17・1～5；ロマ8・3；フィリ2・6～11；ガラ3・13

⑥父なる神は死に至るまで従順であられた御子を義とし、死人の中からよみがえらせました。そして、これを受け入れ、キリストによる罪の赦しを信じる人を神は価なしに義とされます。したがって、「神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされる」（ロマ3・26、口語訳）のです。

ガラ3・13；マコ15・34；フィリ2・6～9；ロマ3・25～26；同10・10；同3・28

⑦信仰によって義と認められた者は、すでに罪の支配領域から恵みの支配領域へと移されています。その人にはなお罪との戦いが残っていますが、今すでに不安や思い煩いから解放され、神との交わり（永遠の生命）を与えられているゆえに、神と隣人を愛する生活に踏み出すことができます。

2コリ5・17；ロマ6・11；同8・38～39；1ヨハ3・2；ガラ5・1

⑧「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとり」（1テモ2・5）です。したがって、人類を救う福音はただ一つ、イエス・キリストの御名による救いです。

申6・4；使4・12；ガラ1・6～7；ロマ10・14～17

## 2. 生の全領域における変革

①ただ神の恵みにより、信仰によって義とされた者は、この「義認」の恵みによって、日々聖霊の実を結びます。これを「聖化」と言います。また、同じ「義認」の恵みのゆえに、教会を形成し、一人でも多くの者に福音を宣べ伝える「召命」を受けます。義認と聖化と召命は、一つの恵みのみわざです。決して三つがバラバラに起こるのではなく、常に同時に起こっています。

ロマ6・11；エフェ2・4～6；ガラ3・27；同6・15；2ペト1・10

②「義認」とは、キリストを信じる者の罪がもはや罪として認められず、神との交わりの中に入れられることです。

ロマ8・1～11；1ペト1・8；1ヨハ1・3

③「聖化」とは、キリスト者がただ義認の恵みに基づき、その生の全領域において、日々古い自分に死に、新しい自分に生まれ変わって、神に向かって生きるようになることです。

エフェ4・22～24；ガラ2・20；使20・32；マタ13・23；同7・17

④その人は、父なる神がお喜びになる善い業をするようになります。善い業の基本は、神を「アッバ、父よ」と呼ぶ祈りです。神に「父よ」と祈る祈りから出たものではない業は、肉の業であり、善い業とは言えません。

ロマ8・14～16；ガラ4・6；マコ14・36

- ⑤キリスト者が祈りによって神と結ばれるとき、その人は神を愛し、神を畏れる者となり、強いられてではなく、喜んで、死に至るまで神に従うことを願うようになります。その意味において、その生涯は悔い改めの生涯となるでしょう。また、その人は聖霊の実を結び、「キリストの香り」を放つ者となるでしょう。

ガラ5・16～17；同5・22～23；詩1・1～3；2コリ2・14～15

- ⑥「召命」とは、キリストの祭司、また復活の証人として、世に遣わされることです。キリスト者はその存在と生活の一部ではなく、その職業生活・家庭生活・社会生活の全体が、全生涯にわたって、神に召されています。したがって、職業もまた、単なる食べるための苦役（創3・17）ではなく、召命との関わりで考えられるべきです。召命の自覚は、キリスト者に真の生きがいを与えるでしょう。

- ⑦キリストの福音を証しするためには、自分がキリスト者であることを公にし、いつも隣人のために祈ることが肝要です。

マタ5・44；2ペテ1・10；ガラ2・20；ロマ12・2

### 3. 終わりの日の完成

- ①死人の中からよみがえられたイエス・キリストは、現在わたしたちと共におられるだけでなく、終わりの日に再び来られ、救いの業を完成されます。そのとき、「恵みの契約」が成就し、人々には「罪の赦し、身体によみがえり、永遠の生命」（使徒信条）が与えられます。福音の持つすべての明るさ、希望の力、愛の実践力などは、キリストの復活と再臨の確かさの中に、その根拠を持っています。

使18・9～10；マタ28・18；同28・20；1ペト1・5～9；2コリ6・2；フィリ1・6；黙21・3～4；1コリ15・28；エフェ1・10

- ②復活者キリストは、今も教会の先頭に立って御国の福音を宣べ伝え、戦っておられます。教会は今日も明日もこの主に仕えることを喜びとします。その限りにおいて、教会はこの世にある間は戦いの中にありますが、同時に、すでに主の勝利にあずかっています。すなわち、わたしたちの目には成功と見える日にも、失敗と見える日にも、その労苦は決して無駄ではなく、御言葉は一つとしてむなしく地に落ちることはありません。

エフェ6・12～13；黙1・17～18；ヨハ1・5；マタ10・20；イザ55・11；ロマ10・18；2コリ3・17；同4・7～13；1コリ15・58

- ③すでに死んだすべての者たちの救いに関しては、わたしたちの一切の問いに関する究極の答えをお持ちであられるキリストに完全におゆだねしてよいのですし、またそうすべきです。わたしたちはすでに死んだ者たちについて思い煩うのではなく、生きている人に向かい、神の国を宣べ伝えるべく促されています。

1テサ4・13～14；ロマ11・25～36；ルカ9・60

- ④わたしたちは終わりの日の救いに向かって、「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように」（フィリ2・12）努めるべきです。その日には、わたしたちは死者の中からよみがえらせられ、最後の審判を受けた後、もはや朽ちることのない「霊の体」（1コリ15・44）へと変えられるでしょう。そして、わたしたちが愛し、慕い続けた主の御顔を目の当たりに見、その御名をほめたたえ、永遠に神を喜ぶ者となるでしょう。

ロマ8・31～32；1コリ13・12；エフェ1・10；黙21・1～4



## IV 宣教の対象

宣教（神の和解）の対象は、ひと言で言えば「罪人」ですが、わたしたち日本の教会にとっては、さらに具体的にはどのような人たちなのでしょう。ここでは基本的なことだけを考察します。まず一般的に、福音の前での現代人の特徴の一つであるその「世俗性」（または「非宗教性」）について、次に、日本においてなぜ福音を信ずる者が少数であるかについて考えます。

### 1. 神なしに生きようとする現代人

①宣教に当たっては、罪と罪の赦しの宣告をあいまいにすることはできません。神は教会の宣教を通し、人類に福音を信じ、悔い改めて神に立ち帰ることを求めておられます。それゆえ宣教とは、この世の人々に悔い改めて信仰を勧めることです。

マコ1・14～15；2コリ5・20；エゼ33・11；黙3・20

②罪とは福音の対象である人間が置かれている危機的状況そのものです。それは第一に、神との正常な関係の破綻です。その結果、人間は神との交わりと御国の希望を失い、「故郷喪失」に陥っています。現実的にも、生きる意味と喜びを失い、不安と思い煩いと虚しさの中で自分の存在の消滅（死）におびえています。罪とは第二に、その結果として、あらゆる人間同士の交わりにおいて、各々が自分の利益を追求し、互いに敵意を抱き合い、この世界に愛と平和が失われていることです。その意味においても、人間は自分の故郷や家庭を失っています。罪とは第三に、自分自身との関係のゆがみです。神との交わりを失い、隣人との関係を損なっている人間は、自分自身を正しく認識し、愛し、重んじることができません。

2コリ5・20；創3・24；同3・19；同4・12；同4・17；同11・9；へブ11・16；マコ12・29～30

③人間が神に背いた墮罪の出来事は、今日、世界的な広がりで見られる「神は要らない（神は死んだ）」という「世俗化の状況」として捉えることができます。この状況は合理主義、人間中心主義（ヒューマニズム）、現世中心主義（来世否定）などによって特徴づけられます。また、この世俗化は教会の中にも侵入し、悪影響を及ぼしています（聖書や信仰告白、伝統などの軽視、聖餐の乱れなど）。この教会内世俗化を克服するには、福音の宣教・浸透と共に、伝道の実践以外にありません。

エフェ6・11～12

④今日の日本社会では、世俗化は飽くことなき富の追求（マンモニズム）の結果、「格差社会」、「無縁社会」や自殺の増加等々の現象となって現れ、人々の精神をさいなんでいます。したがって、実質的に言えば、キリスト教への関心や福音への求めは一層高まっているはずですが、すなわち、神、生きる意味、隣人、家族（家庭）、故郷、平安、死後、愛、自己犠牲等々への問いは深まっているはずですが、しかし、その究極の答えが教会においてしか聴けないということは、まさに「神は死んだ」と言われるこの世俗化の状況において、ますます認識されがなくなっています。

創4・17；同11・4；同11・7

⑤それだけに、教会は福音の変わることをないメッセージ（復活、愛、罪の赦しと救い、永遠の生命、救いの確かさなど）が現代社会にとって真に価値あるものであることを確信を持って宣教し、信徒による「地の塩、世の光」（マタ5・13～16）としての証しが一層力強く行われる必要があります。さまざまな手段や機会を用

いて「遣わされて行く」姿勢が必要です。

- ⑥キリスト教主義の幼児施設、学校、福祉・医療施設の働きは、遣わされた地において宣教の一翼を担ってきました。これらのキリストの御名による諸団体・諸施設は、この世が教会に招かれる重要な働きです。今後はますますこれらの諸団体・諸施設と教会とが十分に提携・協力し合っていくことが必要です。

## 2. 異教国日本に生きる同胞たち

- ①日本人の宗教心の根底には、広くアニミズムや祖先崇拝があると言われます。また、神社は日本人の生活のさまざまな局面に影響を与えています。他方、多くの日本人が漠然と「自分は仏教徒だ」と考えているほど、仏教は日本人の救済観、死生観、美意識の根底を支配しています。おそらく、これらの伝統的宗教に対して教会は真正面からその固有のメッセージ、特に超越的な神が一人一人を無限に愛しておられることと永遠の生命(神の国)の希望があることを語り続けるより他にないでありましょう。

- ②国体思想やそれと深く関連するナショナリズムの問題もあります。たしかに、国家統合の精神がキリスト教を自分の味方と思うか敵とみなすかによって、伝道が大きく左右されてきた事実是否めません。

- ③これらと共に、社会秩序を維持するためには、儒教倫理で十分である、または、その方が優れている、という考え方があります。そして、これら日本の諸宗教、ナショナリズム、儒教倫理などに影響されながら、長い間につちかわれてきた日本的心情や日本文化、日本独特のムラ社会などがあります。しかし、いかなる時代にあっても、教会は時代精神におもねることなく、「折が良くても悪くても」(2テモ4・2)伝道に励まなければならないことは、自明のことです。

- ④福音とすでに存在している日本宗教や日本文化との関係性は、「土着化」の問題として論じられてきました。しかし、この土着化の問題は、日本人の古くからある宗教心に福音を同化させるという発想法によっては、解決は得られません。なぜなら、この方法は結局、日本人の古くからある宗教心に聖書の福音を上乗せし、それによって福音を変質させるだけだからです。結局、日本人のキリストへの回心の問題も、土着化の問題も、福音を聴き、心の底からキリストの方へと向くようになることによってしか、解決されないと考えます。そのためには、教会が罪の赦しの福音を純粋に説くことが大切です。

ロマ3・21；コロ1・16

- ⑤キリスト者の証しの生活は多様です。夫婦、親子、兄弟姉妹、友人などとの関係において、キリスト者は多くのよい証しを立てることができます。また、葬儀や結婚式など、教会で行われる儀式は重要な伝道となります。

1ペト2・12；同3・15；フィリ4・8；ロマ12・2

- ⑥他宗教の儀式に参列するときには、相手の信仰を重んじ、また、品位ある態度で祝意や弔意を表すことは大切です。しかし、そこで行われているのと同じような宗教的しぐさが必ずしも求められているわけではありません。また、お墓のあり方など、福音と日本人の宗教意識、家族意識などがぶつかる場面には、十分な配慮の下にふさわしいあり方が求められます。

## V

# 宣教の方法

では、どのようにして宣教の業を進めていったらよいのでしょうか。言うまでもなく、各個教会の形成とその充実をもっとも基本的に求められているものです。その中でも、説教と聖礼典の充実は何よりも急務でありましょう。なぜなら、説教と聖礼典を通してキリストご自身が現臨され、聖霊の助けにより、神との和解が現実に起こることが宣教の中心だからです。そこから信徒の証しの生活が必然的に生まれます。それと同時に、宣教のためには常に、全体教会の健全な育成と成長により、各個教会の伝道協力がとどこおりなく行われることが必要不可欠です。ここでは具体的に、日本基督教団の形成について論じられます。

## 1. 各個教会の形成と充実

- ①宣教においては、神の招きの御言葉が宣べ伝えられ、それによってキリストの体なる教会が形成されていき、さらに教会によって宣教が進められていきます。すべてのキリスト者は、そのために、その全存在が、全生涯にわたって召されています。また、「弱い人に対しては、弱い人となりました。弱い人を得るためです」（1コリ9・22）とあるように、それは根本的に言って、神に仕え、隣人に仕える奉仕の業です。したがって御言葉の奉仕者（教師）は御言葉の奉仕者として、役員は役員として、信徒は信徒として、共に「福音の前進」にあずかれるよう、絶えざる自己訓練に努める必要があります。
- ②教会は宣教の力と指針とを、聖書から与えられます。それは、「旧新約聖書は、神の靈感によりて成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の正典なり」（日本基督教団信仰告白）とあるとおりです。
- ③各個教会の伝道と教会形成は、中心的には、聖書が聖霊の力によって説き明かされる説教と聖礼典の執行とを通して、実現されます。  
1テサ2・13；ルカ4・21；ロマ10・17；マコ3・29；使16・14；1コリ14・24～25；2コリ3・17
- ④「説教が聖書に基づき、主によって立てられた説教者によって真摯になされたとき、必ず神の言葉となり、神の言葉である」と信じる信仰は、教会にとって生命線であり、重要です。言い換えれば、説教は、イエス・キリストの現臨そのものを担い、伝達しています。そして、そこで神との和解が現実に起こります。  
ルカ4・21；1テサ2・13；イザ55・11
- ⑤それだけに、説教者にとって、説教をいかに豊かにするかが共通の課題です。説教が本当に神の言葉を語っているかどうか、および、それが本当に聴衆に届いているかどうか、絶えず吟味される必要があります。もっとも重要なことは、説教者が本当に聖書テキストと真摯に向かい合って神の言葉を聴いているかどうか、ということでありましょう。特に、釈義における「黙想」が真に喜びの業となっているかどうか問われます。なぜなら、説教がこの喜びの業の裏付けを欠くとき、それ以外のどのような努力をしても、もはや説教が喜びをもって語られることも、喜びをもって聴かれることもないからです。すなわち、単なる説教者の宗教観や世界観の披瀝、時事問題の解説になり、あるいは聴衆におもねる説教になって、「生けるキリストの御声」（ルター）となることができません。また、説教が聴衆への愛と人間理解を欠くときにも、同じように聖霊の力を失い、聴衆の生活から遊離し、聖書や教理の言葉の単なる説明に終わって、聴衆の心に触れることができなくなります。力強い説教は、同時に力強い伝道説教でもあるはずです。
- ⑥もちろん、すべての説教者が必ずしも最初から説教の賜物を十分に与えられているわけではありません。ですが、それは召命を受けた者が切に主に祈り求め、真剣に自己研鑽に努めるなら、必ず豊かに与えられ、また、

日々増し加えられるはずのものです。そのためには、説教者自身の篤い祈り、ならびに信徒の理解と祈りによる支えが必要です。また、それらに基づいて、共同の学びが、分区、地区、支区、教区、教団ならびに神学校などで適切に行われることや、説教者同士が自主的な学びのグループを形成し、相互批評、相互研鑽などに励むことが不可欠です。さらに、牧師が霊的回復のために一定期間退修し、祈りと学びができる機会や施設などが整えられることが望ましいことです。

- ⑦イエス・キリストが定められた洗礼は、罪の洗いと再生の恵みの礼典です。洗礼は宣教の具体的目標として常に重んじられ、祭りのような喜ばしさで祝われるものです。また、教会学校教育の具体的目標として意識されなければなりません。

マタ28・19；マコ16・16；ロマ6・4；テト3・5

- ⑧イエス・キリストが定められた聖餐は、新しい契約を想起し、祝うための礼典です。旧い契約が「戒め」（出20・1～17）、「契約の血」（同24・8）、「神前の食事」（同24・11）によって厳かに締結されたように、新しい契約も「愛の戒め」（ヨハ13・14）、「キリストの血」、「新しい過越の食事」によって厳かに締結されました。これにあずかることによってわたしたちは神の国に入り、主と一つにされて、新約の時を主と共に生きることが再確認されます。この新約の時とは、人々が終末における御国での食卓を待ち望みながら、「主よ、来てください」（1コリ16・22）と祈る時です。したがって聖餐は、求道者も共にあずかる愛餐とは根本的に違い、洗礼を受けた信仰者のみが信仰と真実をもってあずかるべきものです。

ルカ22・14～20；1コリ11・23～26；使2・42；ルカ24・30～31；コロ3・2～3；ガラ2・20

- ⑨信徒にとって、教会とは自分が帰るべき神の家であり、そこでは終わりの日の礼拝の喜びが先取りされています。したがって教会には、聖霊による「一致」が初めから与えられています。そしてその一致は、皆が「一つの希望にあずかるようにと招かれている」（エフェ4・4）からこそ成り立ちます。すなわち、教会は神の招きにより、共に御国を目指す希望と福音宣教の務めにおいて一つです。

エフェ4・4～6

- ⑩教会は祈りを一つにすることによって、ますます霊的に強められ、礼拝を中心とした宣教する教会へと整えられます。したがって、宣教する教会は祈祷会をはじめ、共に祈ることを重んじるべきです。

使1・14；同13・3；マコ11・17

- ⑪教会には聖霊による一致がすでに与えられている、という信仰に立つとき、初めて、「その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように」（エフェ4・1～3）と努める各自の真剣な「課題」が自覚されます。教会の交わりのもっとも基本的な理念は、互いに赦し合い、仕え合い、戒め合い、魂を配慮し合う交わりです。そのようにすれば、その教会は慰めの共同体として造り上げられていくでしょう。

使2・42；ロマ15・1；ロマ12・9～13；フィリ2・1～5；マコ10・43～44；エフェ4・29；1ペト4・7；ガラ5・25～6・10；マタ18・15～20

## 2. 信徒の証しの生活

- ①信徒は証しの業を通し、宣教の重要な一翼を担います。証しとは、キリストを指し示すすべての言葉と行い（生活）のことで、

創12・2～3；ロマ10・14～15；使2・42；1ペト2・5

②特に信徒の中から選ばれてその教会を支える役員となった人は、教師と共に役員会を形成し、教師を補佐する重要な役割を持っています。大事なことは、役員への選出をキリストご自身の光栄ある「召命」と受け止め、キリストの訓練に喜んで服することです。「任職の辞」にあるように、「常に聖書を研究し、朝夕恵みの座に近づいて祈る」(『日本基督教団口語式文』) ことが大切です。そうすれば、必要な聖霊の賜物を豊かに与えられ、日々成長し、必ずや受けた召命を感謝するようになるでしょう。

③信徒は教会を形成すると共に、その延長線上において、それぞれ家庭、職場、社会に遣わされていきます。その言葉と行いによって福音の証し人となるためです。「異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」(1ペト2・12)とあり、また、「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい」(同3・15)とあるとおりです。召命に生きるキリスト者は、「折が良くても悪くても」(2テモ4・2)福音の証し人となり、隣人を教会に招く者でありたいものです。

1ペト3・9

④すべての信徒は、御言葉を聴くことにおいてますます練達の人となります。そのためには、礼拝において語られる御言葉によって主と出会い、伝道や証しの力をいただくことが肝要です。そして、週日においても聖書に親しみ、「密室の祈り」を守るよう努める必要があります。

ロマ5・4 ; マタ6・6

⑤「聖書に親しむ」とは、聖書全66巻をまず通読すること、次に、聖書日課などにより、丁寧に繰り返し読むことです。それによって得られるものは測り知れません。聖書独特の神中心的な思考方法が体得できますし、神の救いのご決意の確かさと救済史の全貌を知り得ます。それによって、自分が何のために生まれ、何のために召されたかを悟り、今自分が歴史の中で、特に神の救済史の中で、どこに立ち、何をなすべきかを聖書から知ることができるようになります。

⑥それゆえ、教師は自ら聖書に親しむことはもちろんのこと、信徒が自ら聖書を繰り返しよく読むよう十分に指導する必要があります。いわゆる「聖書通読」や「聖書日課」や「家庭礼拝」の伝統の回復こそは、日本の教会が底力を養う上で必要な道です。

エゼ3・3 ; 2テモ3・15~16 ; 詩1・2 ; 同119・50 ; 同119・25 ; 同119・105 ; ルカ10・41~42

### 3. 信徒の社会的証しについて

①信徒は日常生活における行いや言葉による証しの他に、より組織的に福祉、医療、教育などの「愛の業」(教団信仰告白)を実践することにおいても、福音の前進に資することができます。その人はキリストの十字架の愛に支えられて「神の愛」を証しすることになります。

マタ5・13~16 ; 同25・40

②また、信徒は「神の義」を認識し、「社会活動」に取り組むべきです。自由、人権、平等、世界平和など、人が共有しうる理念を福音の光の下で判断できるキリスト者は、神の義の実現を祈り、みずから努めることにおいて社会の問題と関わるができるのです。ただしそれは、愛から出た奉仕の業であり、終末における神の国の完全な実現を常に待望するような業でなければなりません。

マタ5・13~16 ; 同13・51~52 ; アモ5・24

③ただし、政治の領域では、さまざまな問題があり、複雑な利害関係やイデオロギーがからみ合っているので、

一方的な判断を下すことは困難です。したがって、十分慎重になり、御言葉による信仰的判断を求めて熱心に祈るべきです。なぜなら、歴史を支配しておられるのは神だからです。

- ④また、信徒は「神の平和」を証しする者として、平和のために祈ることにおいても福音を証しすることができます。特に平和への希求は、人類の普遍的な願いであり、それだけに、キリスト者の証しを必要としています。

マタ5・9

## 4. 地の果てがなくなるまで—宣教協力の必要性

- ①主は弟子たちに、「あなたがたの上に聖霊が降ると・・・地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使1・8）とおおせになり、わたしたちに世界宣教をお命じになりました。宣教とは、常に、その地域における教会全体が一致協力してその地域から「地の果て」がなくなるようにすることです。この理念に立つならば、日本伝道のためには、個々の教会も、分区、地区、支区、教区、教団も、この「全体教会」の理念に立ち帰って宣教協力をすることが求められます。

エフェ4・4～5；使19・21；同21・13；ロマ15・25～28；2コリ8～9章

- ②宣教協力のために必要なのは、信仰の一致と、宣教理解（本理論Ⅰ～Ⅲ）および宣教協力に関する一定の合意です。ここで言う「一定の合意」とは、公同教会の諸信条に言い表された信仰に立ちつつ、諸教派において告白されて来たそれぞれの伝統的特質を神の恵みの豊かさとして受け止め合うことです。

- ③日本基督教団は合同教会である上、歴史が浅いため、伝統が未形成であり、教会観の不一致や不明確さがありました。そのため、信仰や伝道方策においても、教会訓練に関しても、はなはだ合意が形成されにくい状況がありました。その成立の過程からして、「信仰の一致」に関しても、「宣教理解」に関しても、「宣教協力に関する理解」に関しても、初めから一致や合意が存在していたわけではなく、それらは常に形成されつつある、としか言えません。しかしながら、教団は1954年に信仰告白を制定し、また、1969年の万博問題に始まった試練を経て、独自の教會的伝統を形成しつつ、「公同教会」としての実質を体現していく歩みを続けています。したがって、教団が合同教会として、これからもますます豊かな伝統を育みつつ、真の公同教会へと改革され続けていくならば、実質的な宣教協力がなされ得ます。その唯一の確かな基礎は、日本基督教団信仰告白と教憲・教規です。

- ④教団が合同教会であることは、一つの強みでもあります。なぜなら、欧米で生まれたさまざまな教派的伝統をそのまま日本に移植することよりも、すべての教会が一致して日本社会に伝道することの方がはるかに有意義だからです。合同教会である教団は、公同教会であることを絶えず志向することによって、今後の日本プロテスタント伝道の中心的役割を担うことができます。

- ⑤合同教会が真の公同教会となるためには、聖書を重んじる必要があります。ただし、聖書にはさまざまな解釈が可能ですから、その解釈が独善的にならないために、基本信条（世界信条）や福音主義的諸信条によく学び、公同教会の信仰的伝統を重んじる必要があります。

2テモ1・14；1テモ6・20

- ⑥聖書と伝統との関係については、次のことが言えます。まず、聖書が聖霊の権威によって読まれるとき、それは教会が常に信頼し、服従すべき教会の「上」にある権威と見なされます。聖書正典はその意味で、教会の「上」にあり、教会の自由にはなりません。次に、これに対して、教会内の諸伝統の持つ権威は、教会の「中」にある権威です。それらは、教会が御言葉に応答し、真に教会となるために必要不可欠なものとして生まれ、神の

言葉の権威を高めるためのものとして成長してきました。したがって、これらの伝統は、たとえどのように優れた信仰告白や教会法であれ、固定化せず、真に伝道の使命に生きようとする教会においては、常に神の言葉によって整えられるものです。

⑦教団が合同教会でありつつ、公同教会を体現することを目指すとは、日本の宣教に一致協力してたずさわるという大きな目標のために、自らが聖霊によって告白した信仰告白に自主的に拘束されつつ、教憲・教規を遵守し、自らが形成しつつある良い伝統を大切にしていくことを意味します。なぜなら、この「良い伝統」の形成なしに、信仰の一致、宣教理解および宣教協力に関する合意は形成されないからです。

⑧教団は、教団信仰告白の一致と宣教理解における一定の合意に基づいて協力して伝道すべきです。すなわち、教団と教区、一つの教区と他の教区、教会と教会、都市部の教会と地方の教会などのさまざまな関係における人事の交流、学び合い、財政を含めた助け合いなどです。そのためにはまず、教規に定められた教団、教区、支区、地区、分区などの機能が正しく発揮され、伝道に力を合わせるよう努めなければなりません。

⑨全体教会がある地域全体に宣教する場合、教区、支区、地区、分区、地域などで自主的な伝道協力グループを形成することもできます。その成否を握る鍵は、各個教会主義の克服です。すなわち、御言葉の奉仕者も一人一人の信徒も、自分たちの伝道協力グループに属するすべての教会が自分たちの教会であると考え、その中で特に自分たちが共に礼拝する各個教会があり、そこからさらに自分たちが遣わされている地域が「地の果て」（使1・8）である、と考えることです。そこから、さまざまな伝道協力が生まれます。牧師同士の協力、説教その他の共同研鑽、講壇交換、信徒のさまざまな合同集会など、また、経済的互助、共同の開拓伝道などが可能です。そのようにして、その地域のすべての教会が根を下ろし、地域全体から「地の果て」がなくなることが、伝道協力の目標です。

2コリ8・13～14；フィリ4・14

⑩教団が伝道する教団となるために、「伝道局」の設置が望まれます。伝道局においては、ふさわしい権限を託された局長の下に伝道計画が実行に移されます。また、伝道局は全教団的な視野に立ち、教団全体の伝道が活性化されるために、対象を絞って重点的に、かつ比較的長期にわたって伝道または応援伝道を実施することができます。そのようにして、一つの地域が霊的に活性化すれば、霊の炎が他の地域に飛び火することが期待されるからです。

⑪21世紀は通信や政治・経済のグローバル化に伴い、世界宣教を考える場合にも、教会全体の伝道協力や一致・合同を考える必要があります。そのために、教団自身が「御霊のたもう一致」のもと、確固とした信仰に立つ教会として育てられ、伝道に邁進する必要があります。また、世界宣教のための祈りを篤くし、世界の諸教会との協力を深めていくべきです。

## VI

### 宣教の目標

宣教は、終わりの日における神の国の成就を目指してなされます。世界史とその中で展開される救済史は、この目標に向かって進んでいます。では、わたしたちが毎日たずさわっている宣教の業は、この最終目標との関わりでは、どうなっているのでしょうか。また、その中で、世俗史と救済史とはお互いにどのように関わり合っているのでしょうか。ここでは、教会と国家との関わりがどうなっているかについても、考察がなされます。

## 1. 神の国の成就

①神は世界史を統治するお方であり、同時に、その究極の意義である救済史を導き、御国を成就されるお方です（エフェ1・4～5）。その際、世界史それ自体には究極の意義はなく、それはカルヴァンがいみじくも述べたように、その上で救済史が演じられ、神の栄光が現れるための「神の栄光の舞台」と呼ばれるべきものにしか過ぎません。舞台には、その時々により、明るい部分もあれば暗い部分もあります。しかし、舞台そのものが栄光に輝くのではなく、その上で演じられる救済史が成就することにおいて、神ご自身が栄光に輝き、また、すべての栄光が神に帰せられるのです。

黙21・1～6

②救いにあずかる者はキリストが再び来られる日、「罪の赦し、身体のみがえり、永遠の生命」を与えられます。そして、完成された聖徒の交わりとして、神が建てられた永遠の都で神を賛美する者となります。

黙5・11～14；同21・22～26；ヘブ11・16；同12・22

③また、そのような大きな歴史的関連においてだけでなく、日常生活を考えても、この時間の中で一人のキリスト者が生まれることを、主は「今日、救いが来た」と言ってお喜びになりました（ルカ19・9；同23・43）。それゆえ、教会は洗礼を受ける者が与えられることにおいて神に栄光を帰し、それを特別な祝福と考えることが許されています。

④神の国はすでにキリストの復活においてこの世に到来し、神の観点から見れば、畑はすでに色づいています。キリストはすでにこの世に勝利されましたので、キリストの再臨は、この世のただ一つの希望となり、光となりました。にもかかわらず、キリスト再臨の日がまだ来ないのは、ひとえに、父なる神が「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと・・・忍耐して」（2ペト3・9）おられるからです。それだけに、キリストは御国の到来を近い将来のものとして、絶えず目をさまして祈っていなさいとわたしたちに命じられました。それゆえ、キリスト者は終わりの日を待ち望みながら、喜んで宣教に励むことが許されています。

フィリ1・6；ルカ11・20；同12・32；同17・21；2コリ6・2；ヨハ16・33；黙22・20；マタ24・13～14；マコ13・33；ヨハ4・35；マコ4・26～29；マタ9・37～38

## 2. 日本社会および世界が神の国を映し出すこと

①神が世界史を終わりの日まで統治する仕方は、次のとおりです。神は教会に御言葉による統治をゆだね、国家に「剣」による統治をゆだねられました。

ロマ13・1～7

②神はご自身に背くこの世を憐れみ、国家を頂点とするさまざまなこの世の自主・自律的な秩序を立てられました。神は国家においても、ご自身の栄光ある御国とその平和な統治をある程度まで映し出すことをお許しになりました。すなわち、国家は悪の勢力に対抗して相対的な福祉・正義・平和などの実現のために建てられています。また、そのようなものとして、国家は一般に自主・自律的に政治・経済を管理し、法・諸制度、警察組織等々を持ちます。そしてそのようなものとして、国家はどのような政体であれ、原理的には、神の秩序の一部であり、神によって建てられ、また、倒されます。

ダニ2・21；1テモ2・2；ロマ13・1

③ただし国家は、たとえ最善と見えても、それを統治する人間の理性は墮落し、暗くなっているため、その福祉・



正義・平和は常に混乱と腐敗の危険におびやかされています。その意味で、教会はそれらのために執り成しの祈りをささげると同時に、その正しい維持発展のために福音を宣べ伝え、神による永遠の愛・義・平和を証しするのです。

ロマ13・1；1ペト2・13～14；マタ5・13～14

- ④教会が教会として世界平和や国家・社会に関わる関わり方は、基本的には、神の言葉を宣べ伝えるという関わり方に限定されています。ことに御言葉の奉仕者は、時代におもねることなく永遠の福音を語ることによって、世界・国家・社会に対して御言葉に基づく判断ができ、力強い証しを立て得る信徒を養い育てるという、間接的な仕方でのみ関わるべきです。

マコ12・17；1コリ7・26；使4・19

### 3. 神に栄光を帰すべきこと

- ①教会の宣教は、永遠にほめたたえられるべき三位一体の神の招きに応え、神から遣わされた教会が神の力によって為すのですから、そのすべての局面において、栄光が神に帰せられるべきです。

ロマ11・36；同16・27；エフェ4・6

- ②宣教の具体的規範であられるイエス・キリストは、この世の過ぎ行く秩序に対しては、保守主義者でも革命家でもありません。彼は究極的なものに対しては究極に関わり、究極以前のものに対してはそれにふさわしい相対的な関わり方をすることを教えられました。それとは反対に、主は神の国のためには、父母・兄弟（マコ3・34；ルカ9・59，61）、家・畑・財産（マコ10・29）を捨てることを要求され、新しい「神の国」の交わりと奉仕に生きるべきことをはっきりとお命じになりました。

申8・3；マタ4・4；マコ2・21～22；マタ16・24～27；2コリ6・17～18；1コリ7・21；ルカ9・60；同9・62；マタ10・34～39

- ③それゆえ、すべてのキリスト者は、この世からは自由であり、その国籍は天にあります。他方、この世に生きている間は、なお国家・社会に帰属し、その建設や持続や改善の責任の一端を担っています。ただし、キリスト者がこの世の歴史に関わる関わり方は、この世の人々が関わる関わり方とは根本的に異なっています。なぜなら、キリスト者は福音を証しする存在として、福音の前進のために関わろうとするからです。したがって、キリストに従うことに反することを国家・社会から強いられた場合でも、キリストに従い続けるのです。

フィリ3・20；1コリ5・10；2コリ6・17～18；1ヨハ2・17；1コリ7・30～31；使4・19；同5・29

- ④国家の理性的な力がサタンの力に敗れ、自らを神格化することによって御心にいちじるしく背き、悪魔化する場合がありますと聖書は教えています。それは、「神のもの」が奪われたときです。すなわち、福音が福音であることができなくなり、教会が教会であることができなくなり、信仰告白が信仰告白であることができなくなる時です。具体的に言えば、礼拝が禁じられたとき（または偶像礼拝が強いられたとき）、宣教がいちじるしく妨害されたとき、信仰箇条のいずれかまたは全部を否定するよう強要されたときなどです。そのとき、教会は、まさに与えられた神の言葉を宣べ伝えるという戦いにおいて、国家に抵抗するのです。教会はその信仰告白のゆえに、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れる」ことなく、「むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れ」（マタ10・28）つつ、神に栄光を帰すのです。

黙13・2；2テモ2・9；出5・1